

6. モデル地域の交流拠点となる組織のあり方

モデル地域の交流拠点となる組織のあり方は、やんばる3村を取り巻く環境、やんばる3村のグリーン・ツーリズムの現状、今後の取組み要望及びグリーン・ツーリズム推進上の課題を整理し、クロスSWOT分析によりグリーン・ツーリズムの今後の方向性及び組織のあり方を示す。

(1) やんばる3村のグリーン・ツーリズムの現状

やんばる3村のグリーン・ツーリズムの現状、既存活動組織、現在の民泊等の受け入れ体制を以下に示す。

やんばる3村のグリーン・ツーリズムの現状

○民泊等の受入れ体制

- ・やんばる3村では、各村それぞれにおいて、「結くにがみ」、「おおぎみまるとツーリズム協会」、「東村観光推進協議会」が“民泊・体験”活動の中心となっている。
- ・「やんばる交流推進連絡協議会」がやんばる3村における民泊の統括組織となっている。
- ・民泊の利用者は主に修学旅行生である。
- ・各組織が旅行会社から民泊農家と連携して、修学旅行生等を受け入れている。
- ・内地の学校等への営業は、3組織が集まって実施している。
- ・受入農家数は、国頭村24農家、大宜味村35農家、東村60農家。
- ・民泊の質を保つため、現在は受け入れ人数をコントロールしている。
- ・修学旅行のハイシーズン（10～12月）とその他の時期では、受け入れ人数に大きな差がある。
- ・民泊の中での体験は農業体験や農村での生活体験が主であり、一般観光客の受け入れを考えた場合は森林体験やマリン体験が求められる。

既存活動組織

【やんばる交流推進連絡協議会】

◇設立：2010年

◇活動：3村の民泊事業の統括組織（3村で2年毎に持ち回り） ※平成24年度時点の事務局は、大宜味村

【合同会社 結くにがみ】

◇設立：2010年観光案内所としてスタート（民泊は2007年から実施）
2012年合同会社

◇活動：民泊、各種ツーリズム・体験、観光案内情報発信

【NPO法人 おおぎみまるとツーリズム協会】

◇設立：2008年おおぎみまるとツーリズム協議会設立、取り組み開始
2010年NPO法人化

◇活動：民泊、各種ツーリズム・体験

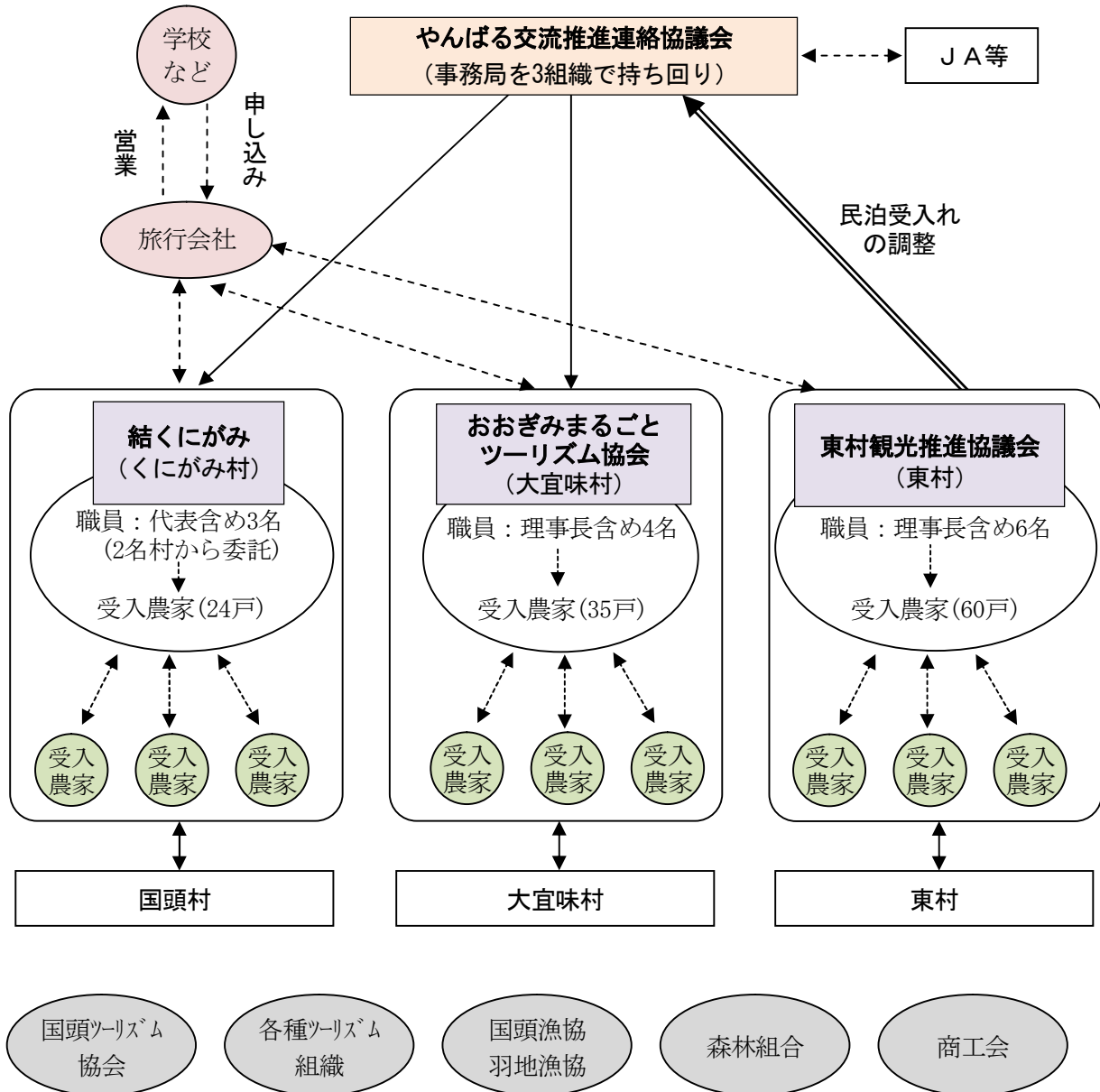
【NPO法人 東村観光推進協議会】

◇設立：2001年商工会の山学校海学校として取り組み開始
2010年NPO法人化

◇活動：民泊、各種ツーリズム・体験

現在の民泊等の受入れ体制

現在の民泊等の受け入れ体制は下図のとおりである。



(2) やんばる3村のグリーン・ツーリズム推進上の課題

各組織から挙げられた今後の取組み要望及びやんばる3村を取り巻く環境を踏まえて、やんばる3村のグリーン・ツーリズム推進上の課題を整理した。

今後の取組み要望（各組織からの聞き取り結果より）

①魅力的な体験メニューの開発

- ・沖縄への修学旅行性の減少への対策
- ・ロングステイに結びつく体験メニューの開発
- ・地域の自然を活かした体験型観光、環境教育につながるプログラム開発

②地域住民の協働による地域活性化

- ・受入れ農家の確保、
- ・品質確保の徹底
- ・地域イベントの掘り起こし、地域食材の活用

③民泊予約システムの導入

- ・3村共有の民泊予約管理システムの構築

④やんばる3村のPR

- ・各村の特徴、それぞれの資源を活かしたプログラムの開発
- ・特産品の開発、やんばるブランドの強化
- ・来訪者向けの総合案内所
- ・メニュー開発、特産品開発、旅行プラン等をコーディネートする組織

⑤外国人の民泊の受入れの促進

- ・外国人に対応できるような組織・体制
- ・外国語の勉強会（英語、中国語など）

⑥耕作放棄地等の活用

- ・耕作放棄地を活用したレンタルファームでの農業体験、遊休地利用の体験型農業



やんばる3村を取り巻く環境

①他地域との競合

- ・金武町・宜野座村や本部町、名護市など周辺市町村での民泊の実施
- ・伊江村（参考資料参照）など、民泊では競合地区が多い

②立地

- ・巨大観光施設や景勝地が名護市・本部町にあり、やんばる地域への来訪者が少ない。

③人口

- ・3村ともに人口の流出、少子高齢化、農業従事者の減少、高齢化、過疎化、公共事業の減少による失業者の増加が進行している。

④自然

- ・やんばるの森（亜熱帯照葉樹林）が80%を占める豊かな自然に恵まれている。

⑤農業

- ・農業粗生産額の多い順に、花き、豚、野菜、果実、鶏、肉用牛、さとうきびである。



グリーン・ツーリズム推進上の課題

①受入れ体制

◇組織

- ・広域的な地域の拠点となる組織の設立、組織・地域連携の体制整備が必要である。
- ・各村単独では具体的なグリーン・ツーリズムの推進やPR活動に限界がある。このため、グリーン・ツーリズム、農業、林業、漁業、工芸等の多様な人や機関とのネットワーク化を図り広域的推進体制を構築する必要がある。これによってメニュー、魅力、受入れ数等の拡大、食の多様化、効率的な情報発信等を行うことができる。

◇人

- ・担い手育成、人材確保により、様々なプログラムに対応できるように実践者を増やす必要がある。
- ・地域住民がお互いに協調、理解し、地域全体で来訪者をおもてなしする意識の醸成を図ることが重要である。

②受入れ水準（質）

- ・先進地視察、他地域の実践者との交流、研修会の開催、マニュアル作成等により、推進協議会、受入れ農家ともに、地域での一定水準の確保・質の向上を図る必要がある。

③民泊者（来訪者）の対象

- ・修学旅行生を中心に、一般客、企業研修、外国人客等、様々な来訪者に対応できる農家・漁家の育成が必要である。
- ・来訪者のニーズを把握し、様々な来訪者を受入れ可能なプログラムを用意する必要がある。

④体験メニュー

- ・各村の地域資源の掘り起こし、“やんばるならではの”の資源を活用したさまざまな体験メニューを開発する必要がある。
- ・やんばるの普段の生活が体験できるメニューを開発する必要がある。

⑤旅行会社等への営業

- ・旅行会社等への営業を積極的に行い、販路の拡大（販売チャネルの確立）を進める必要がある。
- ・村役場、観光協会、商工会との連携を深めるとともに、旅行会社、レンタカー会社、航空会社、広告代理店等、観光関連事業者との連携を図る必要がある。

⑥情報発信（PR）

- ・インターネット、カーナビ、パンフレット、マスメディアなど、各種ツールによる効果的な情報発信が必要である。
- ・3村でどのような体験ができるかを明確にした、受け手にわかりやすい情報発信が必要である。
- ・口コミによる情報発信も効果があるため、おもてなしの水準を確保する必要がある。
- ・3村共通の情報発信システム、民泊予約管理システムの整備が必要である。

(3) やんばる3村のグリーン・ツーリズム推進のための方向性（案）

上記を踏まえ、やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための今後の方向性（案）について、クロスSWOT分析手法を活用して抽出した。

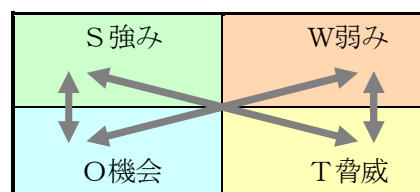
やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための今後の方向性（案）は、3村のグリーン・ツーリズム関係者との座談会において検討した。

やんばる3村のグリーン・ツーリズム推進のための方向性（案）を次頁に示す。

★★SWOT分析とは？★★

◆SWOTのクロス分析とは、「強み」、「弱み」、「機会」、「脅威」を右図のようにクロスさせ対応すべき課題を抽出する手法である。

◆組み合わせ別の主な検討ポイントを下表に示す。



【クロスSWOT分析における組み合わせ別の主な検討ポイント】

組み合わせ	戦略の方向性	主な検討ポイント
強み×機会	積極的攻勢	「強み」によって「機会」を最大限に活用するために取り組むべきことは何か？
強み×脅威	差別化戦略	「強み」によって「脅威」による悪影響を回避するために取り組むべきことは何か？
弱み×機会	段階的施策	「弱み」によって「機会」を逃さないために取り組むべきことは何か？
弱み×脅威	防衛的施策	「弱み」と「脅威」により最悪の結果となることを回避するために取り組むべきことは何か？

やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進に係わる「強み」「弱み」「機会」「脅威」

内部要因	<p>強み (Strengths)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①豊かな自然を有する農山漁村である ②地域資源が地域全域に広がっている ③3村それぞれにグリーン・ツーリズムを推進する組織がある ④3村連携によるやんばる交流推進連絡協議会を立ち上げ、広域的な取り組みを始めている ⑤民泊体験後の修学旅行生からは、よい反応が得られている ⑥民泊を中心として、多様なグリーン・ツーリズム実践者が活動している ⑦「グリーン・ツーリズムに取り組んでみたい」という意欲のある農家・漁家が各村で見られる ⑧行政、大学、NPO、事業者等の参画による、やんばる3村の持続可能な地域づくりに関する研修会や、やんばる観光まちづくりセミナー等を開催している ⑨公共の宿泊施設は点在している ⑩地域特産物のシークワサーは健康に効果的 ⑪各村において、既にブルーツーリズムやエコツーリズムに取り組む実践者もみられる。 	<p>弱み (Weakness)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①グリーン・ツーリズム実践者は個々に活動しており、連携や情報発信が不十分である ②地域全域に点在する豊富な地域資源や「やんばる地域ならではの」地域独自の資源を活かしきれていない(地域資源の連携や情報の集約・発信が不十分) ③特に、やんばる地域の「食・特産品」が活用されていない ④3村の連携は、民泊のみにとどまっている ⑤民泊に取り組む農家がなかなか増えない ⑥一度に大勢が体験プログラムを実施すると、人が多すぎて自然体験に対する魅力が低下するなどの懸念がある ⑦修学旅行生の受入れ数が時期により大きく異なる。 ⑧人の流れが名護市・本部町までで、やんばる地域北部の来訪者は少ない ⑨地域内の少子高齢化・農業従事者の減少・高齢化が進行している ⑩農家所得が低減傾向にある ⑪農地の減少や耕作放棄地の増加傾向にある ⑫各村とも知名度が低い(国頭村795位、東村997位、大宜味村不明)※
	外部要因	<p>機会 (Opportunities)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①「やんばる」として自然度が高いイメージがある ②車による移動者の増加(旅行者の51%がレンタカー、沖縄県1世帯当り自動車保有台数の増加) ③沖縄来訪者の8割がリピーターであり、ほとんどが連泊する傾向にある ④旅行者の旅行目的、ニーズが多様化している ⑤国民の自然志向の浸透、健康ブーム(ウォーキング、ジョギング、サイクリング人気)、文化観光の人気 ⑥安全安心な食に対する国民のニーズの高まり ⑦伊江村の修学旅行生の受入れが限界状態にある

やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための今後の方向性（案）

		機会(O) ①~⑦	脅威(T) ①~⑧
強み(S) ① ⑪	やんばる3村の強みを活かし、強化しさらに伸ばす	①やんばる3村の魅力の活用	②情報発信力の強化
	弱み(W) ① ⑫	やんばる3村の弱みを克服して、補強し伸ばす	⑤おもてなしの水準確保・質の向上
		③体験型・滞在型グリーン・ツーリズムへの推進	⑥様々な分野の人・組織の連携
		④新たな民泊スタイルの	
			⑧弱みを克服し、脅威を防御する

①「やんばる3村」の魅力の活用

自然、歴史、なりわいを始めとする「やんばる3村」ならではの“強み”を活かし、「やんばるブランド」として魅力を磨き、来訪者のニーズに対応したグリーン・ツーリズムを推進する。

②情報発信力の強化

「やんばる3村」のもつ豊かな自然や様々な取り組みなどの“強み”を活かし、県内外へ積極的に発信して魅力を高めることで、周辺市町村との競合などの“脅威”に打ち勝つ取り組みを推進する。

③体験型・滞在型グリーン・ツーリズムの推進

現在、民泊の受け入れを3村連携で進めている実績という“強み”を活かし、体験型・滞在型グリーン・ツーリズムへの取り組みを推進し、民泊のみにとどまっているという“弱み”を克服する。

④新たな民泊スタイルの提案

利用者のニーズの多様化という“機会”を活かし、農家以外による村民民泊など新たな民泊スタイルを提案し、農業従事者の減少・高齢化や農家民泊に新たに取り組む農家がなかなか増えないという“弱み”を克服する。

⑤おもてなしの水準確保・質の向上

取り組み実践者の他、地域住民も含めて地域全体で来訪者をおもてなしする意識を醸成し、「やんばる3村」の魅力を高めることで、来訪者が少ないという“弱み”を克服し、民泊の競合などの“脅威”から防御する。

⑥様々な分野の人・組織の連携

「やんばる3村」における地域づくりに関するセミナー等の開催など、多様な団体との連携という“強み”を活かし、これらの団体や産官学民との連携を促進することで、“弱み”や“脅威”を克服する。

【グリーン・ツーリズム取組上の「やんばる3村連携体制の確立」によるメリット (1/2)】

1. やんばる地域としての受け入れ体制の確立

①サービス水準の保持・向上が可能

現 状
一村では受け入れ人数も限られ、3村での受け入れ体制はできた。しかし、受け入れ農家側のサービスや体験メニューの一定水準の保持が、各村個別対応では困難な状況にある。

3村連携体制時
サービス水準の保持と魅力的な体験メニューが重要であり、3村連携体制の確立により、村ごとのバラツキをなくし、「やんばる地域」として継続的な受け入れを可能とする。

②活動組織の自立化への足がかり

現 状
一村では取り組みや活動の幅が限定される部分があり、民泊主体のグリーン・ツーリズムとなり、既存組織の自立化が困難な状況にある。

3村連携体制時
3村連携体制の確立により、民泊だけでなく、農業体験、エコツーリズム、ブルーツーリズムとの連携により、収入基盤を確立することで、活動組織の自立化を目指す。

2. やんばる地域としての受け入れ体制の確立

①サービス水準の保持・向上が可能

現 状
4月～6月は農業体験メニューが少ない時期であり、この時期の農家民泊をアピールする魅力に欠ける。

3村連携体制時
東村では、5月～6月は特産のハウスパイン収穫、ローゼル(ハーブ)の植え付け体験が実施可能など、3村が連携することで年間を通して魅力的な農業体験が提供可能となる。

②活動組織の自立化への足がかり

現 状
東村でのマングローブカヌー・トレッキングツアーは満潮時しか出来ないため、実施できるツアー時間が限られる。

3村連携体制時
大保ダム(大宜味村)や福地ダム・安波ダム(国頭村)では季節・時間に関係なくカヌー体験が可能であり、利用者の日程に合わせた体験が実施可能。

【グリーン・ツーリズム取組上の「やんばる3村連携体制の確立」によるメリット (2/2)】

3. 「やんばる」を知ってもらえ、再度、来てもらえる

①地域としての魅力増大

現 状
農家民泊の体験では、受け入れ農家が行う体験にとどまり、やんばる地域の魅力が充分に来訪者に伝わらない。

3村連携体制時
3村連携し、来訪者の要望に合わせて様々なツーリズム（国頭村での漁業体験、大宜味村での森林トレッキング、東村でのカヌー体験等）が提供できる事により、地域としての魅力増大につながる。

②リピーター（やんばるファン）を増やせる

現 状
一つの村だけでの受け入れ時は、その村のことしか、修学旅行生などの来訪者には知ってもらえず、地域の魅力を十分に知らないままとなり、「〇〇村での思い出」になる。

3村連携体制時
「やんばる」での受け入れにより、修学旅行生は「やんばるでの思い出」になり、次回は今回行けなかった場所への訪問や体験参加への思いとなり、リピーターを増やせる。

4. 不測の事態において、問題なく対応できるようになる

①災害時（台風等）の対応

現 状
A村で修学旅行生の受け入れを予定していたが、台風・大雨等で民家や農作物の被害を受けた際には、民家の受け入れや農作業体験ができなくなる場合がある。

3村連携体制時
A村での受け入れが困難となった場合に、逆の海岸側のB村やC村の一部では台風・大雨等の被害が小さい場合には、3村連携により、A村に代わって受け入れが可能となる。

②気候の変化時の対応

現 状
国頭村で海での漁業体験を予定していたが、海が荒れて中止せざるをえなくなり、代替の体験メニューが漁業体験ほど魅力的でない場合がある。

3村連携体制時
3村連携により、大宜味村（塩屋湾）や東村（慶佐次川）でのカヌー体験等の代替となる魅力的な体験メニューを提供できるようになる。

(4) やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための組織のあり方

やんばる3村の現状及びグリーン・ツーリズム推進のための今後の方向性(案)を踏まえ、グリーン・ツーリズム推進のための組織のあり方(案)及びグリーン・ツーリズム推進のための組織・体制(案)を示し、座談会で検討した、やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための組織のあり方(案)を以下に示す。

【やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための組織のあり方(案)】

①「やんばる地域」としてのグリーン・ツーリズムの推進

⇒個々の村では各種活動に限界があるため、「やんばる」の地域として活動が必要

②「やんばる3村」による“地域ぐるみ”の組織づくり

⇒3村の調整役を担える組織と、それを支える既存組織による体制が必要

⇒1つの組織では、不十分なこと・できなかったことを実施する組織が必要

③地域活性化につながる組織づくり

⇒農林業だけでなく漁業や工芸、自然環境など多様な地域資源の活用が必要

④グリーン・ツーリズムへの参加者を増やせる組織づくり

⇒各村が有する魅力を増大・PRできる組織

⑤個人旅行者から修学旅行生まで安全に受け入れられる組織づくり

⇒3村での一定水準のサービスの提供

(安全管理・衛生管理の民泊やグリーン・ツーリズム実践者への教育・指導、各村への調整(利用者数と受入農家との調整)、食材生産の管理等)

【やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための組織・体制(案)】

◇今ある「やんばる交流推進連絡協議会」を発展させて、“やんばる地域グリーン・ツーリズム”における民泊を含むグリーン・ツーリズムの調整役(コーディネート)、販売促進活動役(プロモーション)、教育・指導役を担う組織をつくる。

◇「やんばる地域グリーン・ツーリズム」の中心的組織をつくることによるメリット

①「やんばる地域」としての地域振興・活性化が図られること。

②各種支援を受けられやすくなること。

③1つの組織では予算上、人手などの理由からできなかったことの一部が、できるようになり、「旅行者の増大」、それに伴う農家等の所得増大につながること。

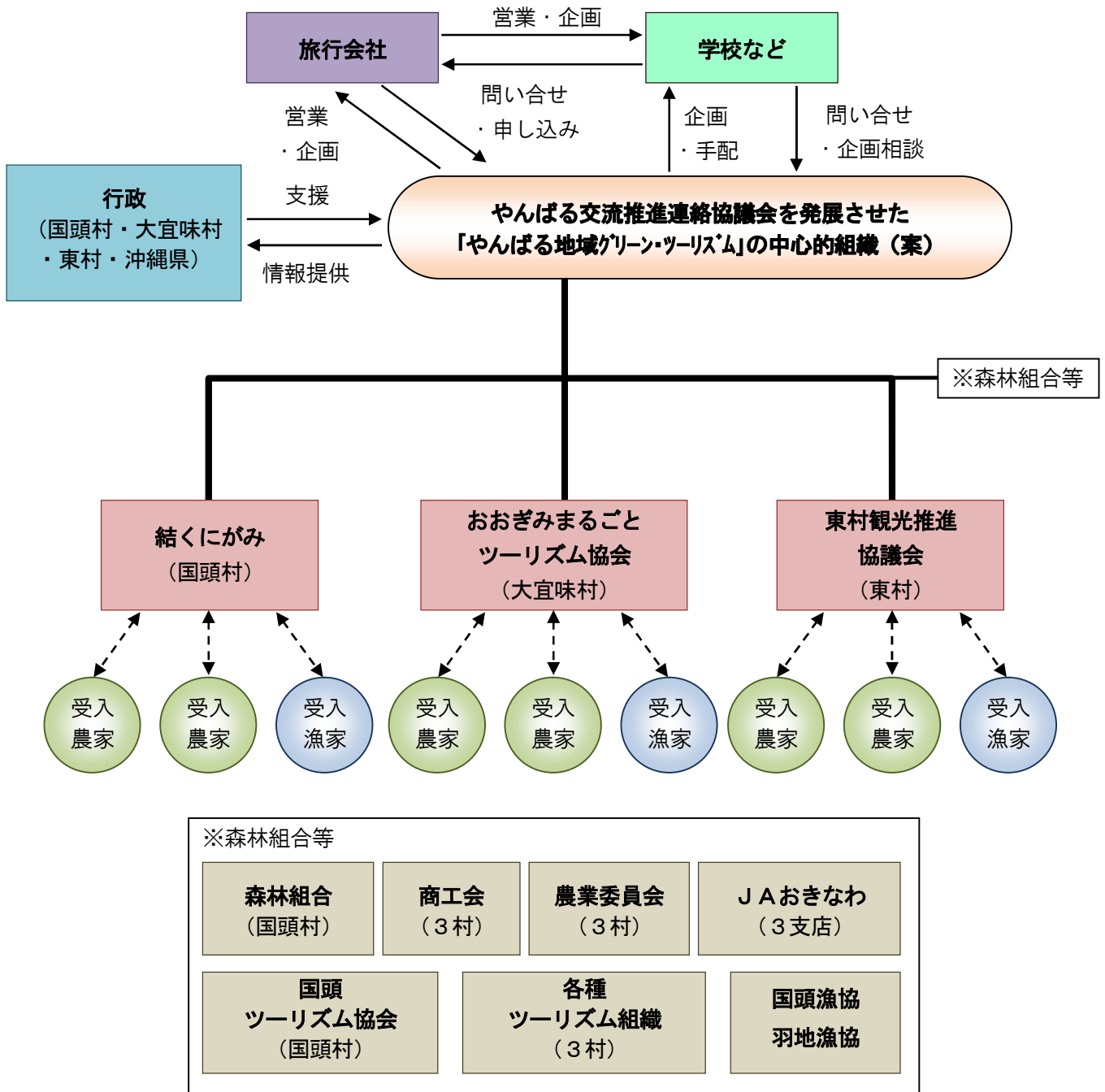
④グリーン・ツーリズム、ブルーツーリズム、エコツーリズム、ヘルスツーリズム等の組織と連携を図ることで、多様なプログラムの提供が可能となること。

⑤各村でPRを行って各村の知名度向上を図るより、「やんばる」の知名度を活用して県内外にPRを行う方が効果的であること。

⑥リピーターの確保がしやすくなること。

各村がそれぞれ魅力ある取り組みを行うことで、1つの村に訪れた利用者が次は他の2村に訪れたいくなる

◆やんばる3村におけるグリーン・ツーリズム推進のための組織・体制(案)



- 【「やんばる地域グリーン・ツーリズム」の中心的組織(案)の役割】
- 3村と民泊旅行者等の調整(振り分け等)
 - 学校・旅行会社への広報・販売促進(営業)
 - 民泊予約システムの構築
 - やんばる地域として一定水準のサービス提供のための研修会開催、マニュアル作成等
 - 各種情報発信(インターネット、旅行雑誌等)